

ワシの羽をめぐ

オオワシ・オジロワシと北海道

野鳥のサンクチュアリともいえる北海道では、冬になると各地で、越冬のためシベリアから渡ってきたオオワシやオジロワシの姿をみることができる（オジロワシの一部は留鳥になっている）。なかでも、知床や根室・釧路など道東地方には多く飛来する*1。

これらオオワシやオジロワシの尾羽（一般にワシタカ類は12枚、オオワシは14枚）は、幼鳥の頃には複雑な斑紋を有するが、成長するに従い白さを増していく。そして、この多彩な紋様への愛好も手伝って、オオワシ・オジロワシの尾羽は、古くから日本社会で最高品質の矢羽として珍重されてきた。

江戸時代の蝦夷地関係資料をみてみると、ワシ羽産地として、享保2年（1717）の「松前蝦夷記」には「釧路、厚岸、霧多布、宗谷、樺太」が、元文4年（1739）の「蝦夷商賈聞書」（『松前町史』3所収）には「十勝、白糠、釧路、厚岸、霧多布」があげられている。また、幕末の玉蟲左太夫『入北記』によると、根室・釧路産のオオワシ尾羽（14枚）は、上質なものは銭2貫以上の値がついている。近世においても、北海道を代表するワシ羽の産地は道東地方であった*2。

古代貴族とワシ羽

こうした北海道産のワシ羽は、近年、北方古代史・北方考古学の分野でも脚光を浴びている。

日本古代のワシ羽については、すでに奈良時代の『国家珍宝帳』（『東大寺献物帳』）の一部。天平勝宝8年（756）にも「鷹羽」や「雕羽」の「箭」の例がみられ、正倉院宝物として現存するものもある。しかしながら、これらが北方産であるかどうかは断言できない。

北方産のワシ羽が、日本社会で流通していたことの確実性が増すのは、平安中期の十世紀頃からである。十世紀に編さんされた法令集の『延喜式』や、源高明がまとめた儀式書の『西宮記』によれば、伊勢神宮の遷宮の際には、「神宝」として八百枚ものワシ羽が必要とされている*3。

また、『西宮記』は、宮中行事の賭弓において、「左、鷹羽。右、肅慎羽」の二組に分かれて競技が行われたことを記している。「肅慎（あしはせ）」とは、中国古



典に登場する伝説的な北東アジア民族のことであり、「肅慎羽」は、実態はともかくとして、「大陸に由来する北方の鳥の矢羽」という認識を示す名称である。これと併記された「鷹羽」は、基本的に北海道産である可能性が高いといえよう。このほか、天皇の即位儀礼である大嘗会の前に、賀茂川などで行われた御禊行幸に付き従う武官の装束にも、しばしば「鷹羽」と「肅慎羽」とがペアとなって登場する*4。

このように、北海道産のワシ羽は当初、「神宝」としての意味合いが強く、天皇や貴族社会の各種の儀式・行事において必要とされる例が多かった。しかし、やがて新興の武士階層によって、上質な矢羽としての需要がさらに増していくことになる。

中世武士とワシ羽

10～12世紀頃、北海道産のワシ羽は、安倍氏・清原氏や奥州藤原氏のような奥羽の勢力にとって重要な交易品であった。奥州藤原氏の2代・基衡が、平泉の毛越寺の本尊造営のため、「鷹羽百束」などの高価な品々を京の仏師に贈ったことはよく知られる。また、鎌倉

*1 ただし近年、スケソウダラ漁の不調や、内陸でのエゾシカ猟（りょう）などの人為的要因により、ワシ類の分布に変化が生じ、さまざまな問題も起きている。北海道ホームページ「ワシ類の鉛中毒について」、神和夫「希少ワシ類と生息環境—鉛中毒死とエゾシカ猟」（『しゃりばり』2004年5月号）など参照。

*2 菊池勇夫「鷹羽と北方交易」（『キリスト教文化研究所研究年報』27）、1993年、養島栄紀『「もの」と交易の古代北方史—奈良・平安日本と北海道・アイヌ』（勉誠出版、2015年）。

*3 養島前掲※2書。

*4 鈴木敬三『武器と武具の有識故実』（吉川弘文館、2014年）、養島前掲※2書。

る日本とアイヌ

蓑島 栄紀 (みのしま ひでき)

北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授

1972年横浜市生まれ。2000年、國學院大學大学院日本史学専攻博士後期課程修了。博士（歴史学）。苫小牧駒澤大学に教員として勤務ののち、2014年から現職。著書に『ものと交易の古代北方史—奈良・平安日本と北海道・アイヌ』（勉誠出版、2015年）、『古代国家と北方社会』（吉川弘文館、2001年）、編著に『アイヌ史を問いなおす—生態・交流・文化継承』（勉誠出版、2011年）、共著に『岩波講座日本歴史第20巻 地域論』（岩波書店、2014年）などがある。研究分野は古代の北海道・アイヌと日本・東アジアの相互関係の歴史。

中期の権僧正・公朝による文永2年（1265）の歌（『夫木和歌抄』巻27（895番））に、

みちのくの えぞがちしまの 鷺のはに たへなる
のりの もじもありけり

と詠まれていることも名高い。ここでは、「エゾ」の地からもたらされるワシ羽の複雑な紋様を、「妙な法の文字」、つまりサンスクリット文字にみだてている。さらに、平安～鎌倉期以後に続々と編まれた『聖徳太子絵伝』『聖徳太子伝記』には、「蝦夷」たちが聖徳太子に服属する伝説上の場面が描かれ、多種多様な高級ワシ羽が献上されている。古代末～中世初期にかけて、ワシ羽は北方の「エゾ」を代表する産物となっていた^{※5}。

中世の軍記物語は、華々しい場面で必ず人物の身にまとった武具のディテールに大きな注意を払っており、矢羽もその例にもれない。例えば、『平家物語』巻9「敦盛最期」では、清盛の甥にして少年公達武士の平敦盛の豪華ないでたちのなかに、「廿四さいたる切斑の矢」が描かれる^{※6}。また屋島合戦の際に那須与

一が平家方の海上の扇を射落とした鏑矢は、「うすぎりふに鷹の羽わりあわせてはいだりける、ぬため^{※7}の鏑をぞ差し添へたる」（『平家物語』巻十一「扇」）であった（薄い色の切斑二枚とタカの羽二枚を互い違いにまぜ合わせた四立羽の矢羽に、鏑は鹿角製）。武士たちは、晴れやかな舞台を演出する小道具として、矢羽になみなみならぬ関心を傾け、個性を競ったのである。

文治5年（1189）、源頼朝は奥州合戦によって奥州藤原氏を滅ぼす。このことは、ワシ羽交易の權益を頼朝が握ったことを意味する。『吾妻鏡』では、奥州合戦直後の文治5～建久4年（1193）にかけて、ワシ羽に関する記述が集中する。奥州を征服した「あかし」として、ワシ羽の存在が脚光を浴びたのであろう。文治6年（建久元年・1190）正月には頼朝から後白河院へ「鷺羽一櫃」が贈られ、同年11月にはやはり後白河院に対して、砂金八百両・御馬百疋とともに「鷺羽二櫃」が贈られている。金・馬とともに膨大な量であり、頼朝による奥州征服、北方交易ルートの掌握を誇示する政治的アピールにほかならない^{※8}。

またこの時期、鎌倉殿・将軍と御家人らが主従関係を確認する正月の垢飯では、しばしば御家人たちから頼朝や実朝に向けて多数のワシ羽が献上されている。「エゾ」世界のシンボルでもあるワシ羽は、成立したばかりの鎌倉幕府にとって、一定の政治的な意味を有したのかもしれない^{※9}。

ワシ羽とアイヌ社会

以上のような平安期以後のワシ羽の需要は、古代アイヌ社会にどのような影響を与えたであろうか。7世紀後半～8世紀頃、主として道南と道央に分布していた擦文文化の人びとは、10～11世紀頃になると、道北や道東方面に向けて、活動圏・居住域を大きく広げていく。従来、その理由として海獣皮の獲得などが想定されていたが、瀬川拓郎氏や澤井玄氏は、これにワシ羽の入手がかかわっていた可能性を推測した^{※10}。継承すべき問題提起である。古代・中世の日本と北海道・アイヌ社会とは、ワシ羽のような「もの」を媒介として、容易に可視化しえない糸で複雑に結びつき、相互依存的ともいえる緊密な関係を構築していたといえるだろう。

※5 瀬川拓郎「蝦夷の表象としてのワシ羽」（『中世東アジアの周縁世界』同成社、2009年）。

※6 「きりふ」は紋様の特徴による矢羽の分類の一種。

※7 「ぬため」は鹿の角の表面にある波のような模様。

※8 蓑島前掲※2書。

※9 蓑島前掲※2書。

※10 瀬川拓郎『アイヌの歴史—海と宝のノマド』（講談社選書メチエ、2007年）、澤井玄「十一～十二世紀の擦文人は何をめざしたか」（『アイヌ文化の成立と変容—交易と交流を中心として』法政大学国際日本学研究所、2007年）など。